

科研費・新学術 A-02 班 第 2 回 論文執筆研修 実施報告

期間：2015 年 11 月 30 日(月) - 12 月 3 日(木)

場所：筑波大学アイソトープ環境動態研究センター 環境動態予測部門 1 階会議室

参加者：北和之(茨城大), 五十嵐康人(気象研), 足立光司(気象研), 青山智夫(筑波大),
緒方裕子(早稲田大), 浅沼順(筑波大), 羽田野祐子(筑波大)

【学生参加者】木名瀬健(茨城大 D3), 小野貴大(東京理科大 M1), 飯沢勇信(東京理科大 M2), 佐藤志彦(筑波大 D3), 池田隼人(筑波大 M2), 岡宏樹(筑波大 M1), 古谷真人(筑波大 M1), 加藤遼(筑波大 B4), 小西将貴(筑波大 B4)

配布資料：論文執筆の方法(五十嵐作成, ppt 資料), 進行プログラム

実施内容

1. 第 1 日

参加者の研究について下記のようにプレゼンテーション・質疑応答を行った。

9:00 開場

10:00 論文執筆研修について(羽田野祐子, 筑波大)

【学生による研究発表】

10:15-10:45 古谷真人(筑波大)

10:45-11:15 岡宏樹(筑波大)

11:15-11:45 木名瀬健(茨城大)

(昼休み)

13:45-14:15 小西将貴(筑波大)

14:45-15:15 池田隼人(筑波大)

15:15-15:45 小野貴大(東京理科大)

15:45-16:15 飯沢勇信(東京理科大)

16:45-17:00 総括と今後の課題(五十嵐康人, 気象研究所)

18:00- 懇親会(あさひや)

2. 第 2 日以降は朝 9 時から夕方 5 時まで、各学生が論文を執筆し、進捗状況を青山・足立・北・五十嵐・緒方・浅沼・羽田野で確認した。修正すべき箇所について、各学生と相談し、朱筆を入れた原稿を執筆者に戻し、論文の完成を目指した。また、昨年度は「参加者相互の話し合いがあまり見られなかった」との反省から、今年度は積極的に交流を図ってもらうことを周知したためか、執筆作業の合間に、内容について学生同士で相談する姿が見られた。従って今年度は、グループ全体での情報共有が更に進んだと言える。連日、夜遅くまで執筆作業をする学生の姿が見られた。また、第 2 日には飛び入りの講演も行われた。

筑波大院生の佐藤志彦氏により、投稿論文に用いる図表に関する工夫に関してミニ講演が行われた。Excelで作成したグラフをAdobe Illustratorで加工する技術について15分程度の説明がなされ、非常に好評であった。最終日は、各人の進捗状況についての確認を行い、どこまで論文が進んだか、また投稿までにあとどのくらいの作業が必要かについて確認を行った(添付資料1)。

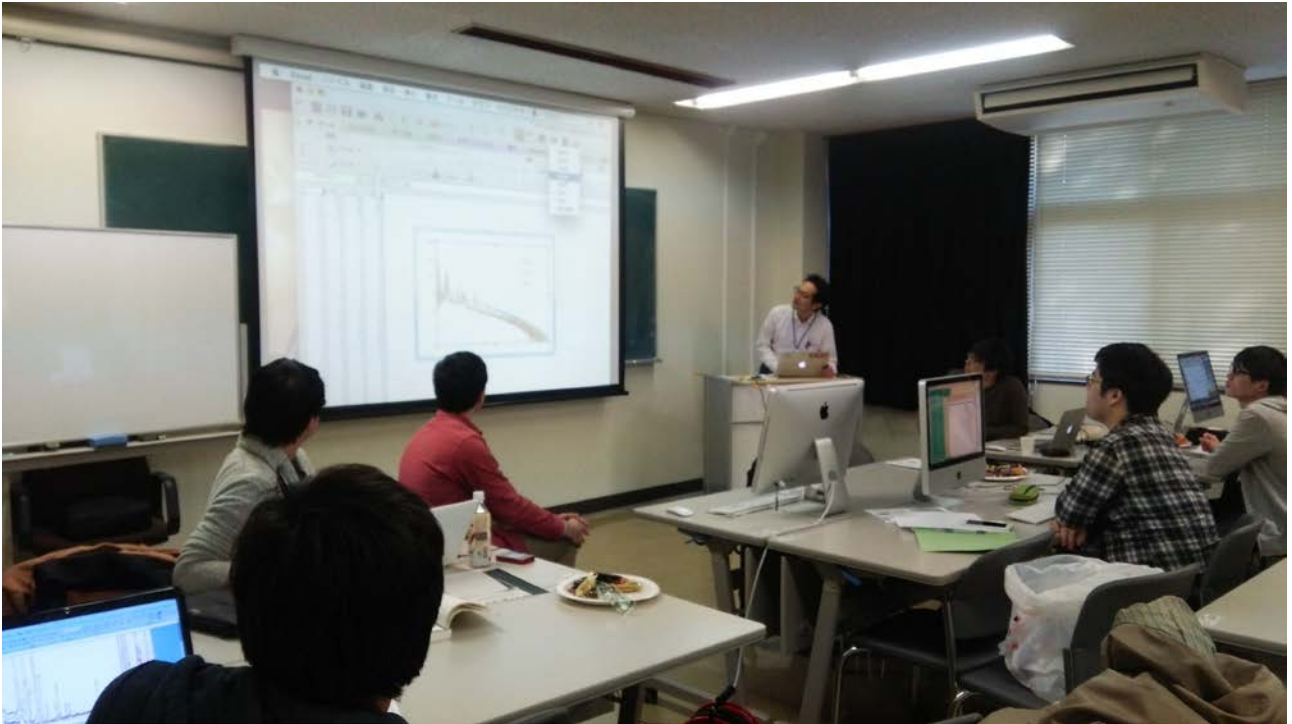


写真1：佐藤氏による論文投稿用の図版作成に関するミニ講演



写真2：浅沼部門長と論文執筆中の学生たち



写真 3: 論文執筆中の木名瀬氏(茨城大)

3. まとめ

好評だった昨年度に引き続き、本年も論文執筆研修を行った。今回はアナウンス期間が短かったためか、参加学生数が昨年度よりやや少なかった。それにも関わらず、参加者は熱心に執筆作業を行い、また研究者や院生仲間に自分から積極的に質問して、問題解決を図ろうとする姿が多く認められた。参加学生の感想は、添付資料1に見られるように、非常に刺激になったというものであった。一方で、研究員・教員は日頃まとまった時間がとれず、論文執筆に割ける時間が少ないことが共通の悩みであるため、このような機会は貴重であると言える。このような取り組みは今後も引き続き行っていくことが有意義だと考え、第3回は2016年7月3日(日)-7月7日(木)(Goldschmidt 会議終了直後)を予定している。

謝辞：浅沼部門長には、会場確保・プリンタ・液晶プロジェクタなど機器類・学内ネットワークに関して大変お世話になりました。学生実験中にも関わらず様々な便宜を図っていただきました。会田さんには、参加者のノート PC のトラブルに長時間おつきあいいただきました。飯島さん、金森さんにはカードキー入館許可の手続き、お茶の準備、部屋の電力などについてお世話になりました。気象研究所の五十嵐様、神谷様には準備段階からアナウンスまで様々な面でお世話になりました。皆様どうもありがとうございました。

【添付資料 1】 研修期間中の作業報告および感想

木名瀬：福島県内でのハイボリュームサンプラーおよび試料のサイズ分布の季節変動とその原因を EDS による組成分析に関する論文を作成した。本論文の内容は次のようなものである。エアロゾルの粒子サイズごとに季節変動を調べたところ、冬場は再浮遊が局所的に起こっている、つまり除染済みの場所と未除染の場所での 2 地点の大気中濃度比が大きく異なることがわかった。反対に、夏場は 2 地点の濃度比は小さくなった。以上の点について、ほぼ完成したドラフトを持参し、最終作業を行った。共同執筆者による校正がなされ、その修正を行った。投稿は年内を予定している。

飯沢：投稿用の図表(SEM, ラジオグラフィ、XANES, XRD による化学状態, SOR 光による散乱スペクトル)に関して体裁を統一する作業を行った。発表 ppt は英語で作成されており、論文にはこの英語を使用すれば良いことを確認した。今回見つかった粒子は、従来言われている hot particle とは若干性状が異なっているため、新規の名称を考える必要がある。

小野：これまでの研究成果を日本語でまとめる作業が終了した。第 2 日には、この和文を英語にする作業を行い、Method のセクションを書き進めた。夜遅くまで木名瀬氏、飯沢氏らと実験結果について話し合い、考察を加えた。今後は Method の完成を目指し、和文の英語化を進めていく。

池田：英語による論文執筆を進めた。先に図版を作った状態で臨めば、純粹に論文執筆に集中できると思います。図版の作成に時間をとられすぎた点~~を~~が反省点です。いろいろな人の研究に関して意見交換ができてよかったです。

岡：英語で論文が 5 割くらい書けました。事前の準備をもっと前からやるべきでした。来年度に生かしたいと思います。

古谷：英語の論文の書き方を教わって、今後のためになりました。期間中の部屋の移動が大変でした。ずっと同じ部屋でやったほうがよいと思います。

加藤：初日に論文合宿内での発表と、最終日にほかのゼミでの発表があったので、論文執筆というよりは発表資料の作成に時間を使ってしまった。それにも関わらず、いろんな先生から指導を受けられてよかったです。まとめられてなかった自分のデータの整理も行えたところがよかったです。

小西：まだ論文を書いたことがなかったが、短期間で集中して成果が出せ、研究が大幅に進んでよかった。